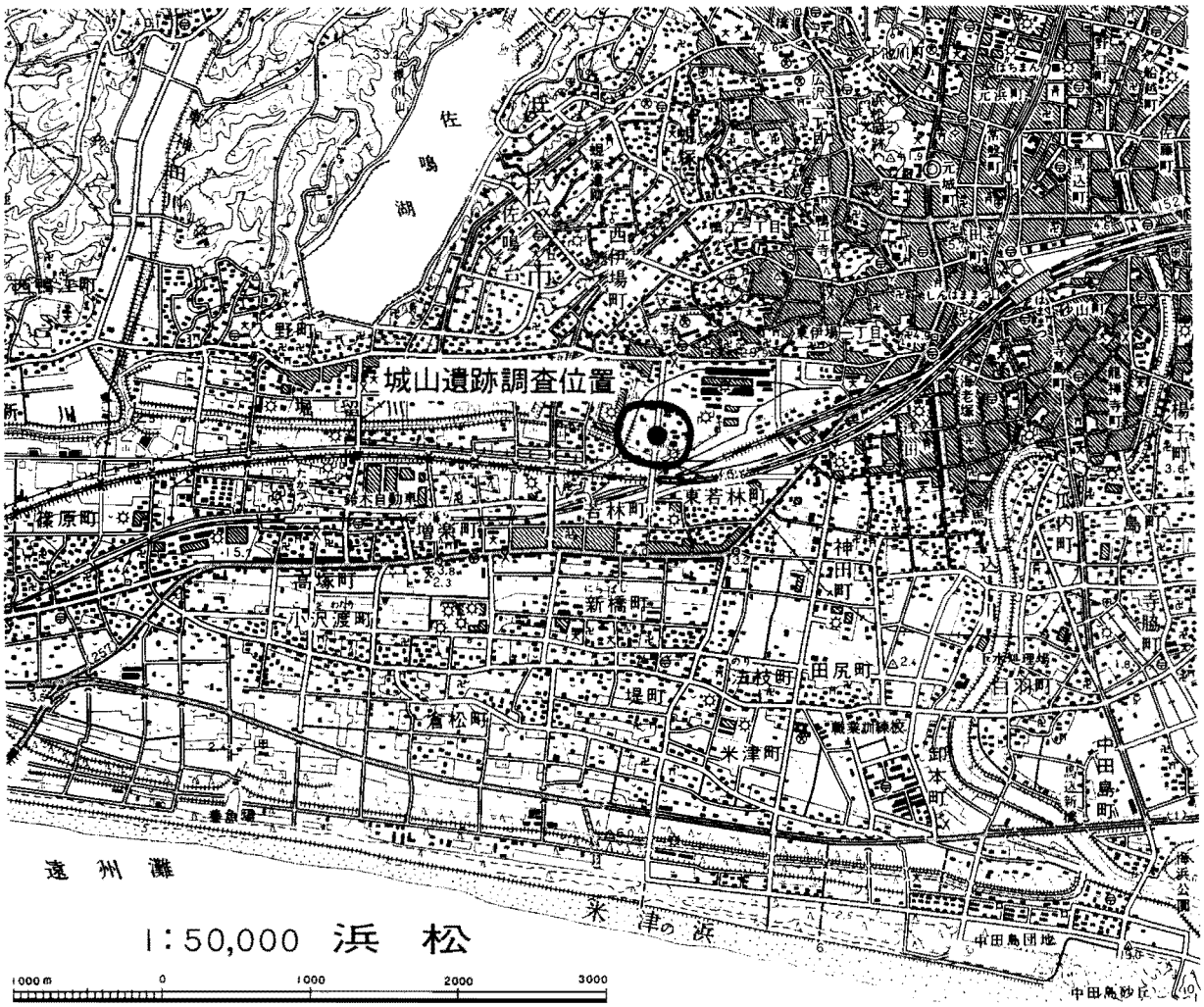
静岡県浜松市

城山遺跡（市下水）

―― 浜松市下水道工事に伴う発掘調査 ――



２００１年３月

浜松市教育委員会

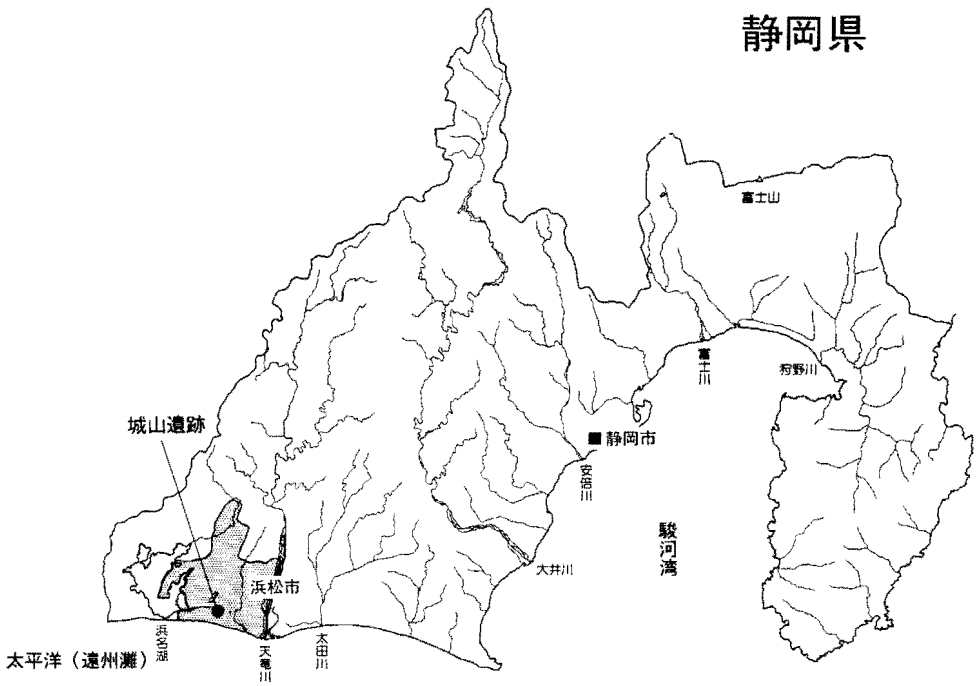
浜松市下水道部

例　　言

1．本書は、浜松市下水道部による下水道本管埋設工事（平成12年度単独第82号南部処理分区枝線管渠築造工事（その２））に先立ち、静岡県浜松市若林町・東若林町地内（市道若林101号線）で実施した城山遺跡の発掘調査報告書である。
2．城山遺跡の発掘調査は、過去７回行われている。今回の発掘調査は、下水道工事に先立って、梶子・梶子北遺跡発掘調査に続いて行われたものである。
3．調査期間　現地発掘調査　　2000年12月４日～同年12月８日
　　整理・報告作業　2001年１月～同年３月
4．調査面積　約88㎡（６ヶ所，１区23㎡・他65㎡）
5．調査体制　調査担当者　　鈴木敏則，鈴木　靖（浜松市博物館）
　　補助調査員　　倉田晴巳（浜松市博物館），熊谷洋子（浜松市文化協会）
6．調査に係る費用は、浜松市（教育委員会・下水道部）が負担した。
7．本書に係る整理作業は，倉田晴巳，熊谷洋子が行った。また遺物の写真撮影と執筆は，鈴木敏則が行った。
8．調査に係る諸記録及び出土遺物は，浜松市博物館が保管している。

凡　　例

1．標高値は全て海抜を示す。
2．調査区の位置出しは既存建造物から。



1．調査経過

浜松市では下水道事業計画に基づいて，下水道管埋設工事を行っている。南伊場町と西伊場町地内のＪＲ東海浜松工場西側に沿う市道では，1994・1997年度に工事が行われ，その工事に先立ち梶子・梶子北遺跡の発掘調査が行われた。そして今回計画された工事区は，同じ市道の南側（若林町・東若林町地内）にあたる。この工事区は，城山遺跡を南北に縦断するものであった。

そこで，浜松市教育委員会と工事の施工主体である下水道部建設課との間で，埋蔵文化財の取り扱いについて協議された。その結果，遺跡を傷つけないために，開削工事を極力やめて，遺構面よりも深い位置に横位から管を打ち込む推進工法で下水管埋設を行うこととなった。それでも工事を進めるためにやむを得ず掘削する試掘掘りやマンホールの立孔については，工事計画と合わせて，また必要経費は下水道部が負担することで，調査を行うこととなった。工事施工業者が株式会社水野組に決まったことから，調査日程や方法など具体的な打ち合わせを2000年11月17日に行い，12月早々に工事計画に合わせて発掘調査を行うことになった。

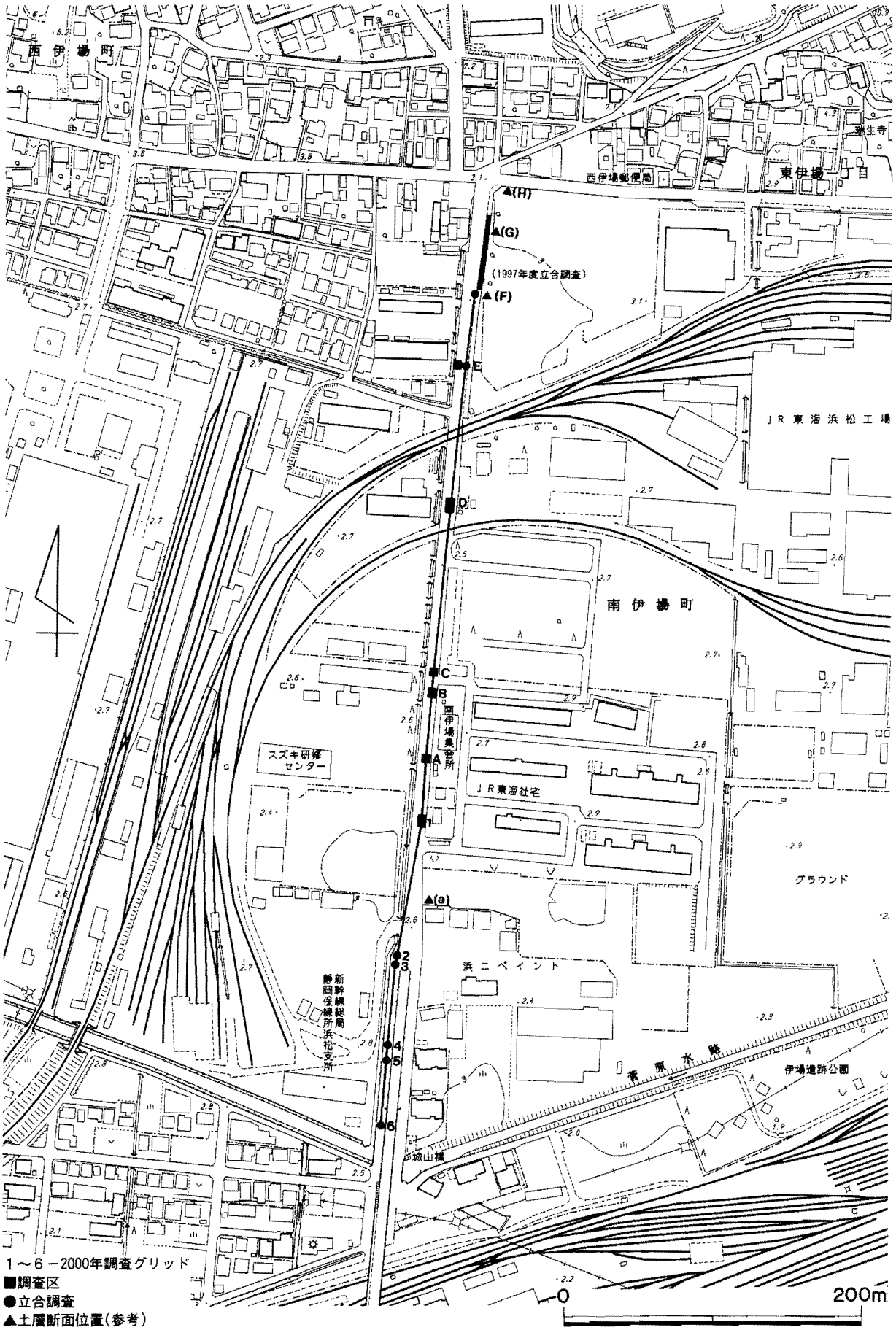
調査をした場所は，第１図に示した６ヶ所である。調査区の名称は，北から①～⑥グリッドと名付けた。2000年12月４日に①グリッドの発掘調査を，同６日に②グリッド，同７日に④～⑥グリッド，同８日に③グリッドの立ち合い調査を行った。遺物が出土し平面調査をしたのは，①グリッドの１ヶ所だけである。他では土層断面の観察を行ったが，③グリッドでは比較的浅い位置で基盤砂層を認めたが，他の②・④～⑥グリッドでは，最低でも地表下２ｍまでは過去に行われた上下水道の工事により撹乱を受けていた。なお土層の堆積状況を観察するのに参考となる梶子・梶子北遺跡での成果（Ａ～Ｈ）と城山遺跡での成果（ａ）を第１図に付加した。また第１図のＡ～Ｅグリッドは，下水道工事に伴って1994年に行われた調査区である。

遺跡名		調査名称	調査期間（現地）	面積	原因	調査主体
城山遺跡		（発見）	1949年８月		（ボーリングによる探査）	(国学院大学)
		１次	1949年12月１日～12月10日		試掘調査	(国学院大学)
		２次	1977年11月18日～12月26日	約 400㎡	埋立工事に先立つ範囲確認調査	可美村教育委員会
		３次	1980年１月８日～３月30日	約1,000㎡	埋立工事	可美村教育委員会
		４次	1980年７月21日～９月23日	約 700㎡	埋立工事	可美村教育委員会
		５次	1992年４～６月・11月	約 800㎡	遊戯場建設	(財)浜松市文化協会
		６次	1995年８月１日～11月30日	約1,400㎡	社員寮建設工事	(財)浜松市文化協会
		７次	1999年１月20日～３月25日	約1,340㎡	新幹線検修庫新設工事	(財)浜松市文化協会
		市下水	2000年12月４日～８日	約 88㎡	浜松市下水道工事	浜松市教育委員会
参考	梶子遺跡	市下水	1994年12月～1995年１月	約 31㎡	浜松市下水道工事	浜松市教育委員会
	梶子北遺跡	市下水	1997年12月１日～12月10日	約 91㎡	浜松市下水道工事(立合調査)	浜松市教育委員会

第１表　城山遺跡発掘調査一覧表

遺跡名	調査名称	発行者	発行年・月	題名
城山遺跡	１次	浜松市役所	1953	『伊場遺跡』国学院大学伊場遺跡調査隊編
	２次	可美村教育委員会	1978	『浜名郡可美村城山遺跡範囲確認調査概報』
	３・４次	可美村教育委員会	1981・３	『城山遺跡発掘調査報告書』
	５次	(財)浜松市文化協会	1993・12	『城山遺跡Ⅴ』
	６次	(財)浜松市文化協会	1997・３	『城山遺跡Ⅵ』
	７次	(財)浜松市文化協会	2000・３	『城山遺跡Ⅶ』
	市下水	浜松市教育委員会	2001・３	『城山遺跡（市下水）』
(参考)梶子遺跡	市下水	浜松市教育委員会	1997・５	『梶子遺跡（その２）』

第２表　城山遺跡関係報告書一覧表



第１図　下水道管埋設に伴う発掘調査位置図

2．調査区の位置と層位

下水道管埋設工事は，まさに城山遺跡を南北に縦断するばかりでなく，北から梶子北遺跡・梶子遺跡を南北に長く縦断するものであった。地形的には，梶子北遺跡の北半（現雄踏街道周辺）が第１砂丘，城山遺跡が存在する所が第２砂丘であることから，砂堤列間湿地を縦断するものと言える。なお今回調査した①グリッドは湿地から砂丘に移行する所，②・③グリッドは砂丘の高まりが存在する所，④～⑥は第２砂丘の南に広がる湿地にあたると考えられる所である。

なお第２図Ｄ・Ｅ・Ｆグリッドの基盤の砂層もしくは包含層の高さを他のグリッドと比べてもらうと，やや高くなっている。これは砂堤列間湿地に天竜川の洪水砂が約3000年前に流入したもので，この洪水砂層の上に，梶子遺跡が立地している。またＢ・Ｃグリッドでは，伊場遺跡から延びている大溝（いわゆる伊場大溝）がちょうど確認された。Ⅰ～Ⅷ層としている層は，伊場遺跡や梶子遺跡９次Ａ調査区での層位と全く同じであった。

弥生時代中～後期の包含層Ｄ層は，①グリッドでも確認されたが，安定的に存在し，しかも土器を多く含むのはＡ・Ｄ・Ｇグリッドである。それ以外の所では，遺物の存在はわずかである。Ａグリッドは当時の水田域，Ｄグリッドは集落域，Ｇグリッドは旧河道（梶子大溝）である。

奈良時代～平安時代初めの包含層であるⅣ・Ⅴ層は，①グリッドでも確認されたが，厚く堆積したものではない。Ⅳ・Ⅴ層は，伊場大溝のＢ・Ｃグリッドと梶子北遺跡の旧河道部Ｇグリッドでは厚く，それ以外の所ではわずかな厚さでしかない。

3．調査の成果

①グリッドは第２砂丘の北側，つまり砂丘北端から広がる砂堤列間湿地へ移動する傾斜部分にあたる。調査区内での砂丘の高さは，南側で標高1.5mに及んでいる。北側での砂丘の高さは，標高0.5mを下回っており，さらに砂丘斜面北端は中近世の溝で切断されている。

層位は，上から１．アスファルト，２．砂礫の山土による盛土層，３．褐色砂層（中近世の盛土層で，耕作された層），４．灰色砂層で灰色粘土が混じる層（中世の溝），５．暗灰色砂層（７～８世紀の土器を含む），６．黒灰色粘質土層（南ほど砂質が強い），７．黒褐色粘質有機質土層（伊場Ⅳ・Ⅴ層相当），８．黒褐色粘土層（弥生包含層伊場Ｄ層），９．黒褐色有機質土層（弥生中期方形周溝墓溝ＳＤ01の覆土），10．明灰褐色砂層（砂丘砂）である。

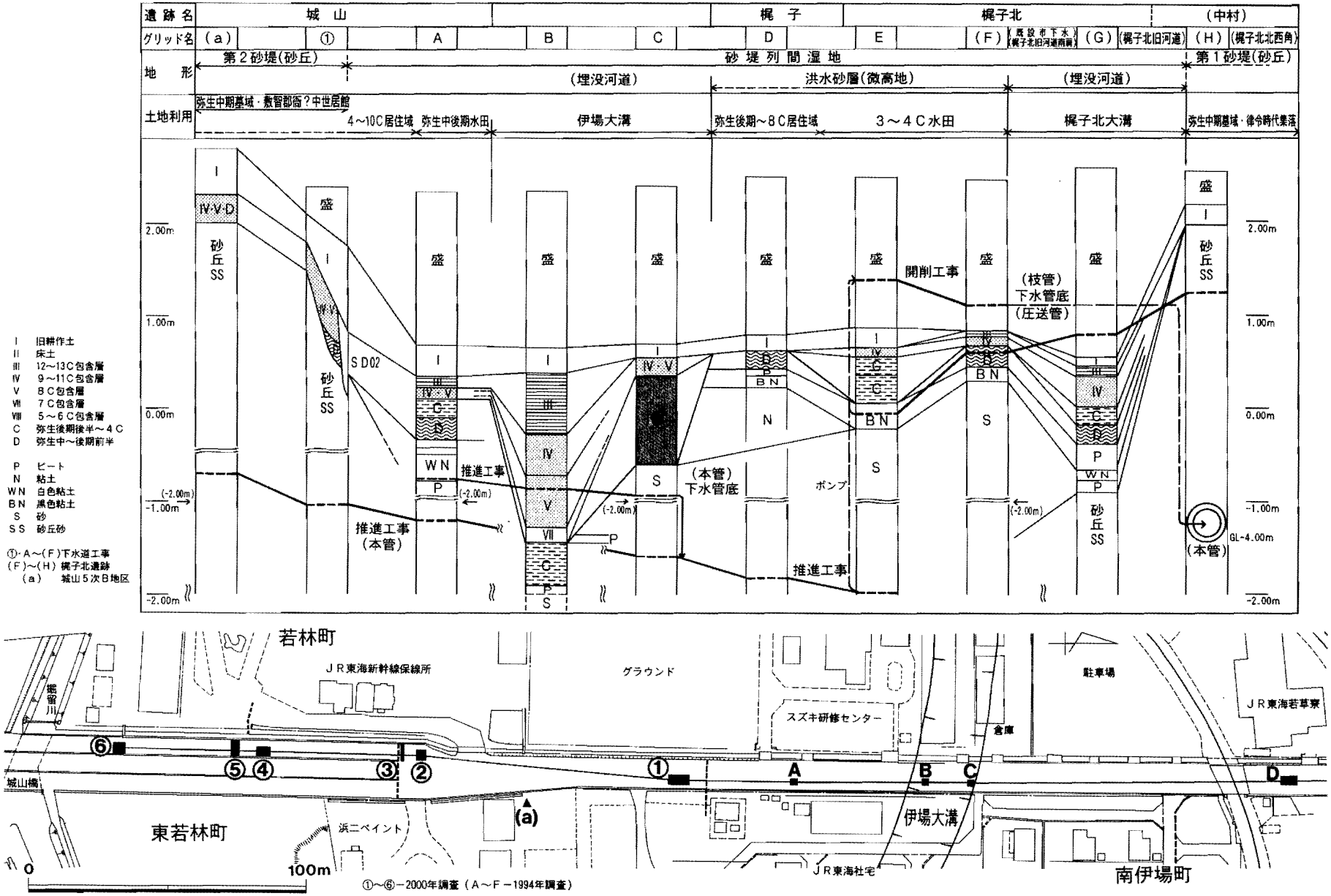
グリッドの北半分には，７・８層とした砂堤列間湿地もしくは伊場大溝の堆積層に近似した層位が確認された。標高も，８層下の基盤砂層上面が＋50cmを下回っている。

検出された遺構は，弥生時代中期方形周溝墓の西側の溝と考えられるＳＤ01，７世紀代の柱穴と考えられるＳＰ01，中世（戦国時代）の溝ＳＤ02がある。

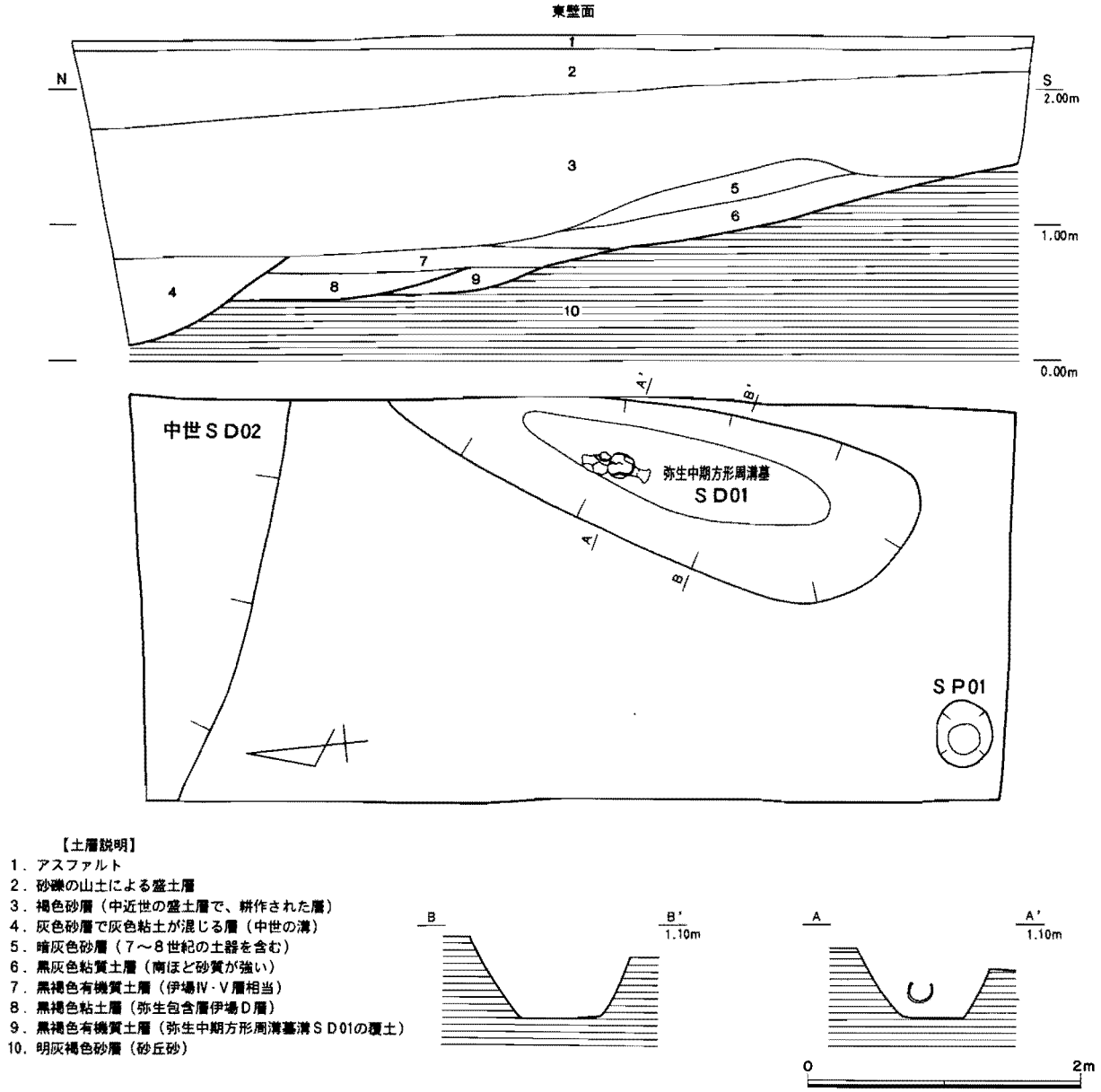
ＳＤ01は南北に長い溝で，方形周溝墓の西側の溝と考えられる。覆土は，８層と同じ伊場Ｄ層に相当するものであるが，やや有機質が強いものである。この溝からは，第４図１に示した中期弥生土器壺が出土した。体部中央で割れ，下半部が北，上半部が南側で，それぞれ接して出土した。土圧で割れたのではなく，盛土部から転落した時に割れたように見える。

ＳＰ01は，明瞭な掘り方を呈し，暗茶褐色土を覆土とした柱穴と考えられる穴である。この穴からは，第４図10に示す７世紀代の土師器甕口縁部片が出土した。

第２図　土層柱状図


遺跡名
城山
梶子
梶子北
（中村）
グリッド名
（a）
①
A
B
C
D
E
（F）
（既設市下水）（梶子北旧河道南岸）
（G）
（梶子北旧河道）
（H）
（梶子北北西角）
地形
第２砂堤（砂丘）
砂堤列間湿地
第１砂堤（砂丘）
（埋没河道）
洪水砂層（微高地）
（埋没河道）
土地利用
弥生中期墓域・敷智郡衙？中世居館
4～10C居住域
弥生中後期水田
伊場大溝
弥生後期～8C居住域
3～4C水田
梶子北大溝
弥生中期墓域・律令時代集落
2.00m
1.00m
0.00m
-1.00m
-2.00m
GL-4.00m
盛
砂丘SS
SD02
推進工事（本管）
推進工事
（本管）下水管底
ポンプ
開削工事
（枝管）下水管底（圧送管）
（本管）
I 旧耕作土
II 床土
III 12～13C包含層
IV 9～11C包含層
V 8C包含層
VII 7C包含層
VIII 5～6C包含層
C 弥生後期後半～4C
D 弥生中～後期前半
P ピート
N 粘土
WN 白色粘土
BN 黒色粘土
S 砂
SS 砂丘砂
①・A～（F）下水道工事
（F）～（H）梶子北遺跡
（a） 城山５次Ｂ地区
若林町
ＪＲ東海新幹線保線所
グラウンド
駐車場
ＪＲ東海若草寮
スズキ研修センター
倉庫
鶴留川
城山橋
東若林町
浜二ベイント
伊場大溝
ＪＲ東海社宅
南伊場町
100m
0
①～⑥－2000年調査（A～F－1994年調査）

ＳＤ02は，グリッドの北端で検出された溝である。グリッド内では遺構の下端を確認できなかったことから，深さは標高で15cmを下回ると考えられる。方向は，東西よりやや南東－北西に振れている。８世紀以前の包含層である７・８層を切断して掘られた溝で，砂層を覆土としていたこと，またカワラケ（第４図13・15）と擂り鉢（16）などが出土したことから，戦国時代の溝と考えられる。



第３図　①グリッド遺構図

４．出土遺物

出土遺物は，第４図に図示した土器類だけである。

１は，方形周溝墓溝ＳＤ01から出土した完全に復元できた壺である。丸味をもつ体部に，ゆるやかに外反する単純口縁部がつく。頸部は折れず，口唇部付近では少し内湾気味に作られている。底部は平底で，胴部下半に弱いながら稜をもつ。体部外面にはハケが施され，肩部はそれがナデ消され，文様が施されている。櫛描横線文で区画された間に，櫛描斜格子文が入れられている。体部内面は下半にヨコハケ，上半に板ナデ調整が施されている。また頸部はナデ，口唇部内外面はヨコナデが施されている。時期はプロポーションと文様から見て，中期後葉の新段階に位置付けられる。土器様式名では，仮称角江様式の後半，もしくは白岩様式新段階に比定される。

２は，円孔透かしをもつ弥生時代後期前半の高坏の脚部下半である。外面はハケの後ナデ，内面はハケが施されている。

３～９は須恵器，10～12は土師器である。

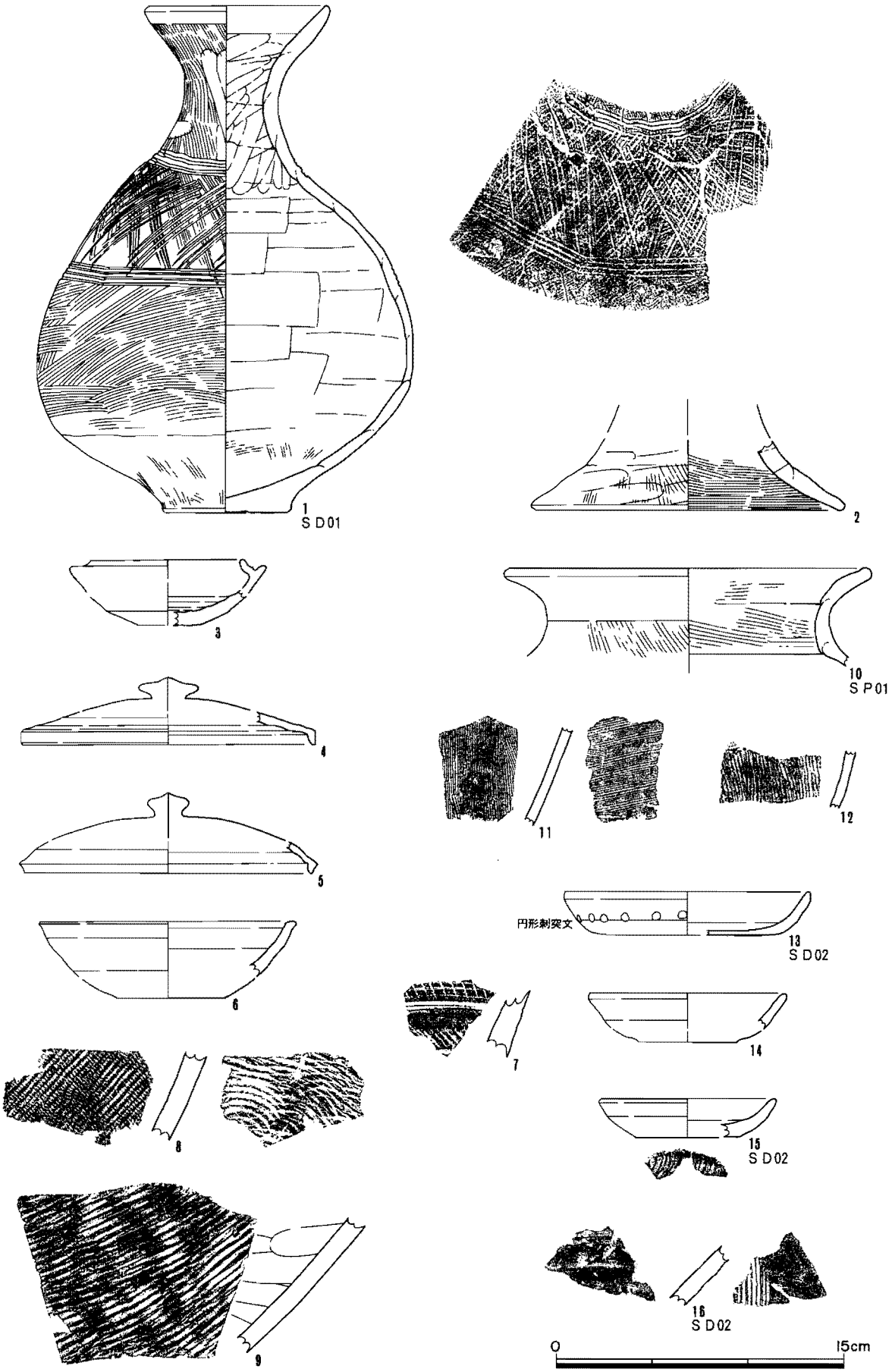
３は，７世紀中葉の須恵器坏身の底部もしくは坏蓋の天井部の破片である。図では坏身としている。４は，８世紀前半の須恵器坏蓋（摘み蓋）の口縁部である。口縁部は，下に明瞭に折られている。５は，８世紀後半の須恵器坏蓋（摘み蓋）である。口縁部は折れが弱く，断面形が三角形に近い。天井部を欠くが，背の高い小型の宝珠形摘みが伴うと考えられる。６は，８世紀後半以降の碗形の無台坏身の口縁部である。７は，７～８世紀の須恵器甕口縁部であり，沈線と櫛刺突文が施されている。８は，６世紀代の須恵器甕体部破片で，内面には同心円叩目，外面には擬格子叩目が見られる。９は，須恵器の甕体部破片で，外面は平行叩目，内面はナデ消し調整が施されている。これは，７世紀以降の製品である。

10は，ＳＰ01から出土した土師器甕である。頸部からゆるやかに外反する口縁部で，口唇部は上に少し突出している。口縁部はヨコナデ，外面は頸部以下をタテハケ，内面はヨコハケで調整されている。これはプロポーションから，７世紀代の長胴甕と考えられる。11と12は，７～８世紀代の土師器甕の体部破片である。

13～15は，中世のカワラケであり，13と15はＳＤ02から出土した。３点ともロクロ成形のカワラケであるが，13は口径12.6cmと大型，14と15は口径10cm前後と小型である。13の外面には，円形刺突文が施されている。このように施文されたカワラケは，城山遺跡５次Ｂ調査区からも出土している。15の底部には，静止糸切り痕が認められる。

16は，戦国時代の擂り鉢の破片である。内面には，櫛描状の擂り目が認められる。

以上出土遺物には，弥生時代中期後葉，同後期前半，６世紀（古墳時代後期），７～８世紀（飛鳥～奈良時代），15～16世紀（中世）のものが存在した。


1
S D01
2
3
10
S P01
4
11
12
5
円形刺突文
13
S D02
6
7
14
8
15
S D02
9
16
S D02
0
15cm

第４図　出土土器実測図

5．まとめ

a．弥生時代の方形周溝墓

今回の①グリッドから，方形周溝墓の西側の溝と考えられるＳＤ01が検出された。またこの溝から，ほぼ完形の中期弥生土器壺が出土した。畿内第Ⅳ様式の後半に並行する時期の土器であることから，中期後葉（新段階）に築造された方形周溝墓であることが判明した。以下，城山遺跡及び周辺で検出された方形周溝墓について，まとめておく。

城山５次Ａ	－方形周溝墓１基？	弥生中期後葉（新）もしくは後期後半？
城山５次Ｂ	－方形周溝墓２基以上	弥生中期後葉（古）
城山７次	－方形周溝墓２基？	弥生中期後葉（古）
城山下水①	－方形周溝墓１基	弥生中期後葉（新）
梶子６次	－方形周溝墓２～３基	弥生後期前半
梶子８次Ｂ	－方形周溝墓１基	弥生後期前半
梶子北	－方形周溝墓２基	弥生中期中葉・後葉（古）
梶子北・中村	－方形周溝墓数十基	弥生中期中葉～後葉（新）
伊場	－方形周溝墓５基以上	弥生後期前半

①グリッドのすぐ南側は，城山遺跡５次Ｂ調査区である。ここからも数基の方形周溝墓が確認され，中期後葉でもやや古相と考えられる土器を出土している。また100mほど南西で行った７次調査区からも，方形周溝墓になりそうな溝を確認している。この７次調査区は，①グリッドとは逆に南側の湿地へ移行する傾斜地に存在する。時期は出土土器から見て，中期後葉ではやや古相を呈するものであった。城山遺跡が存在する第２砂丘上には，弥生時代中期後葉に第５・６図に示すごとく，広く方形周溝墓群が形成されていたと考えられる。

中期の方形周溝墓は，城山遺跡の他に，北方に位置する梶子北・中村遺跡でも多く検出されている。現在発掘調査中でまだ整理が進んでいないため，正確な基数までは記述することはできないが，梶子北遺跡１次調査区（浜松西高校坂下交差点）あたりを中心に，東西数百mを越えて墓域（方形周溝墓群）が形成されていることが判明した。

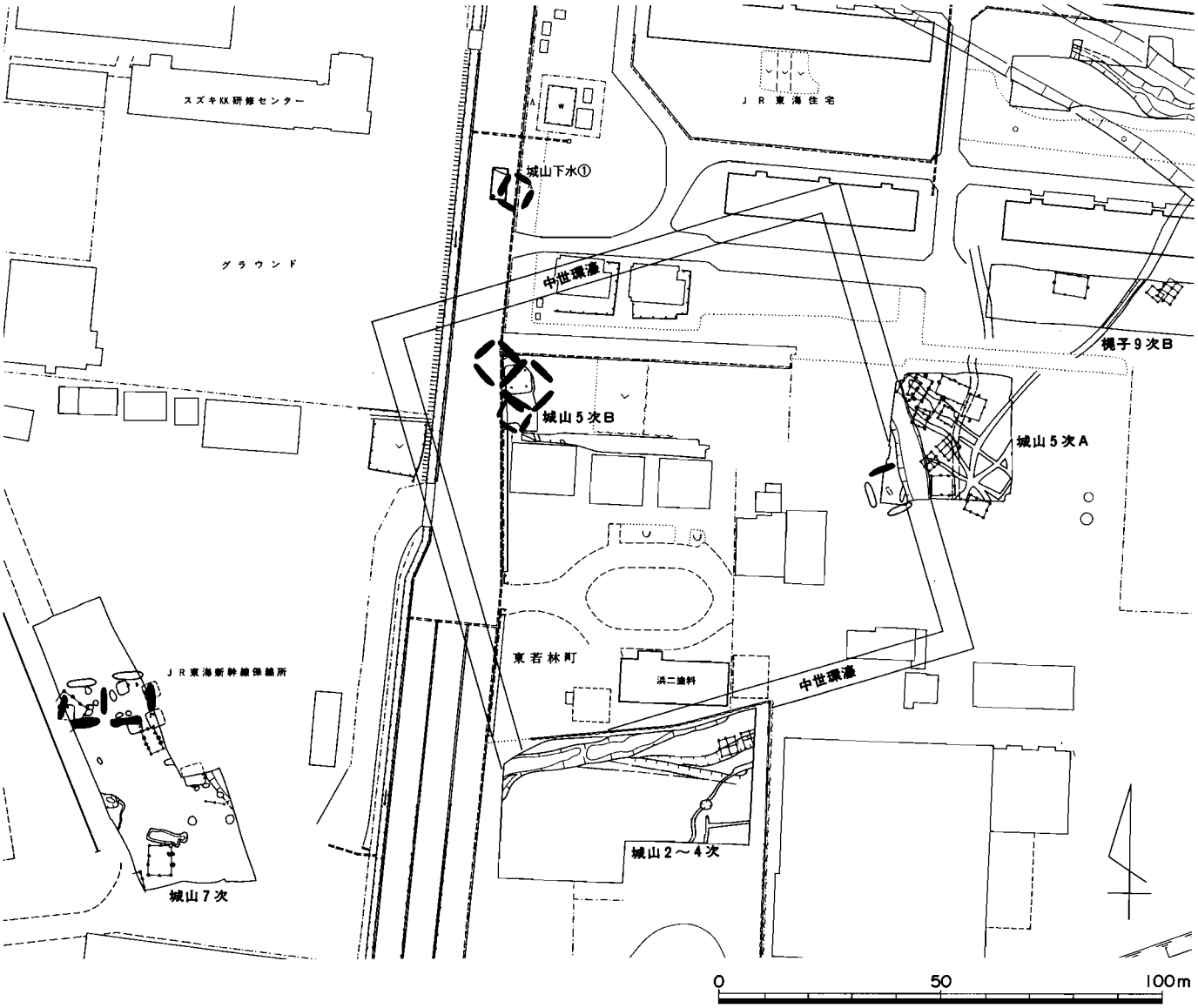
時期は中期中葉の瓜郷様式に遡るものが数基存在するものの，多くは中期後葉（古段階）に位置付けられる。後葉の新段階に降るものも存在するが，後期の例は１例も確認されていない。

後期前半の例は，梶子遺跡６次調査区で２～３基，８次Ａ調査区（環濠外東側）で１基が検出されている。また伊場遺跡では，環濠内北側と環濠外西側に２～３基ずつが検出されている。後期後半は伊場・梶子遺跡の集落が最盛期を迎えている時期だけに，検出された数が全体で10基前後ではあまりにも少なすぎる。なお後期の方形周溝墓は，遺跡の北方に位置する三方原台地縁辺部に存在していた可能性を考慮しておく必要があろう。しかし既に開発され，残念ながらそれを確認することはできない。

方形周溝墓とは別に，土壙群が梶子北遺跡で300基以上検出された。土壙は灰色粘土と黒色粘土がブロック状に堆積していることから，掘った後，直ちに埋め戻されたものと考えられる。こうした状況から，土壙の性格は墓と推定しているが，人骨や副葬品を出土するなどの確証を得ているわけではない。また年代についても全くと言って良いほど土器を伴っておらず，正確な年代を確定するまでには至っていない。上層に存在する水田の年代から，土壙の年代を弥生時代後期前半と推定しているに過ぎない。

ところでこのような土壙は，城山遺跡から東南東に1,200～1,300m離れた鳥居松遺跡でも発見されている。この遺跡では，梶子北遺跡のようなブロック状の覆土を持つ土壙と，水平（レンズ状）堆積の覆土を持つものの両者が存在した。後者は堆積状況から，掘った後そのまま自然に埋もれたと推定されるもので，これらには土器を伴う。この土壙の年代は，出土土器からほとんどが後期前半であるが，わずかに後半に及ぶものがある。前者の土壙は梶子北遺跡と同様に，遺物を伴っていない。年代は層位から，梶子北遺跡と同じ後期前半と考えられている。

ブロック堆積の土壙を墓と考えるのであれば，梶子北遺跡の土壙の被葬者は，南に広がる梶子遺跡の居住者となろう。集落の周辺には，方形周溝墓群とは別に，こうした土壙群だけで構成される墓域が広く存在したことになる。



第５図　城山遺跡で検出された方形周溝墓群

b．伊場周辺の弥生時代集落

南部海岸地域で，弥生集落が成立するのは中期中葉であり，舞阪町大山遺跡，浜松市角江遺跡，同梶子・梶子北遺跡が知られている。さらに天竜川平野には，将監名遺跡が存在する。梶子・梶子北遺跡での集落域は，梶子遺跡の北東部（６・８次調査区）と梶子北遺跡（１次調査区北側）の第１砂丘部である。ともに環濠らしい溝が検出されているが，住居跡と言える確実な例は発見されていない。現在，雄踏街道の拡幅に伴って行われている発掘調査では，第１砂丘部に中期中葉～後葉（古段階）の方形周溝墓が密集して認められた。拡幅部分より北側にも，ゆるやかな傾斜地がかなり存在していることから，墓域の他に集落本体も存在していた可能性がある。今後の調査の進展に，期待したい。

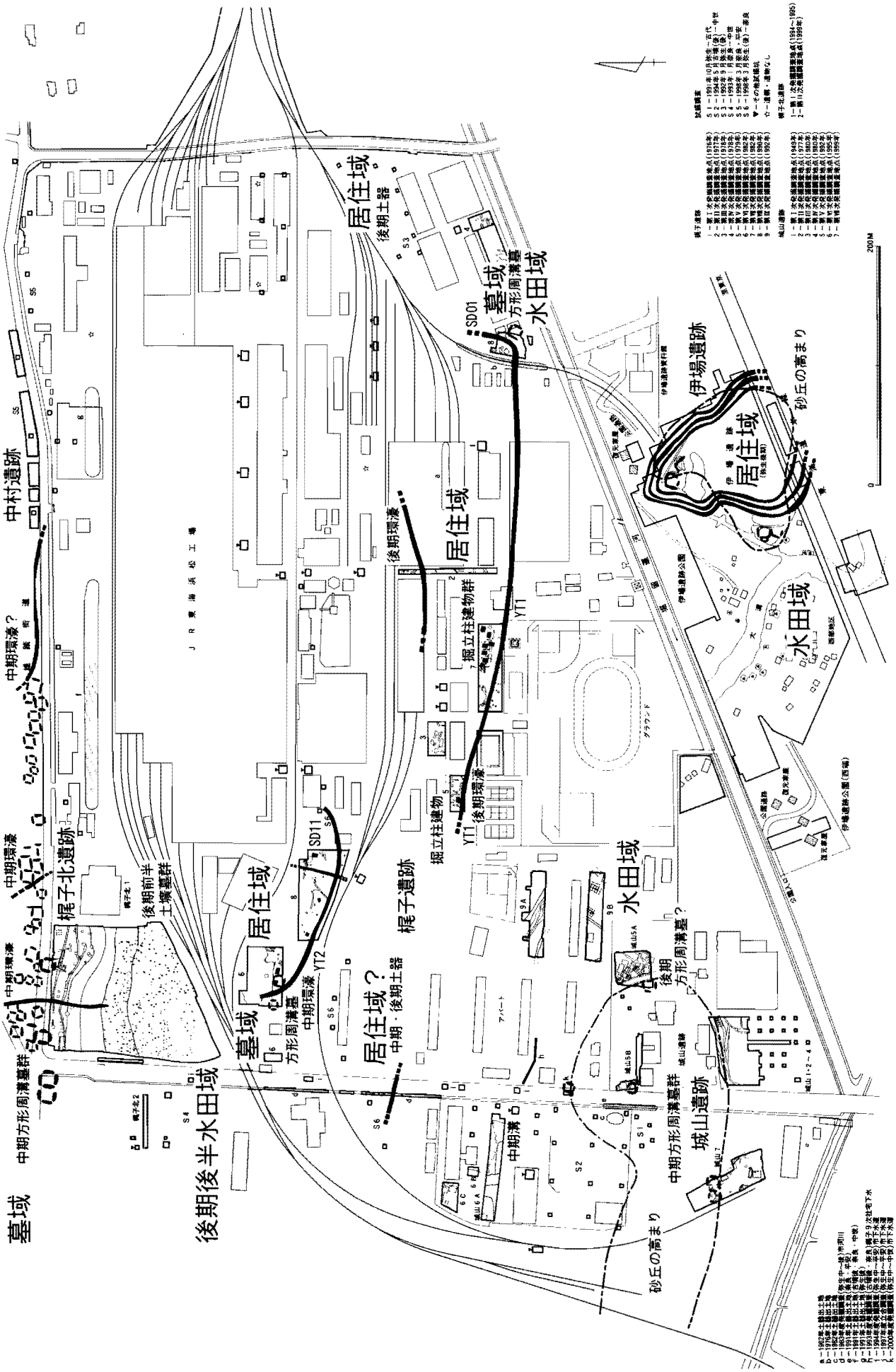
中期後葉の住居跡は，梶子北遺跡の東側に位置する中村遺跡において１軒分が検出されているに過ぎない。この住居跡は，浜松市志都呂町の中平遺跡と同じく楕円形の平面プランをもったもので，床面中央に炉跡が存在した。なお，城山遺跡６次調査では人工の溝１条が発見され，覆土から土器の他，磨製石鏃，剣形木製品が出土した。今回の下水道敷設に伴う①グリッドよりも北に位置する６次調査区周辺には，中期後葉の水田が広がっていたようである。

後期の伊場様式の段階になると，遺跡の広がりは著しい。まず伊場遺跡では，環濠の掘削が開始される。伊場遺跡には３条の環濠があり，最初に掘られたのは内側で，順次外側のものが掘られたようである。伊場遺跡より少し遅れて，梶子遺跡においても１重の環濠が掘られた。伊場遺跡の環濠は，内法で直径約100mで瓢形を呈している。梶子遺跡の場合は，調査面積の関係ではっきりしないが，環濠の大きさは東西400m，南北100m弱であったと推定される。いずれの環濠内にも，掘立柱建物跡は存在するが，竪穴住居跡は見あたらない。低地であったために掘立柱構造の建物を住居にしていたのか，後世の掘削により竪穴住居の掘り方が消失したのかははっきりしない。また梶子遺跡６次調査区の南西一帯や４次調査区の北側にも，溝や多くの土器が検出されていることから，集落域は梶子遺跡のほぼ全域に広がっていたと考えられる。さらに城山遺跡５次Ａ調査区や同６次調査区・梶子北遺跡三永地区でも，少ないながら伊場式土器が発見されているし，南方の鳥居松遺跡・畷東遺跡にも当期の遺構が検出されている。後期における集落の拡大化と小集落の増加は，遠江において著しい。

弥生時代後期後半，欠山様式の段階になると状況は一変する。伊場・城山・梶子遺跡周辺は旧砂丘部を除き，伊場遺跡での調査でＣ層と呼んだ灰青色の粘土層に覆われる。これはこの地が，海進に伴う湿潤化の結果と度重なる洪水のため，居住には不適当な環境になったことを示している。このＣ層中から，伊場遺跡や梶子遺跡（８次Ｂ調査区）などでは欠山式土器が出土した。この層はその後，水田として耕作された層である（梶子９次・梶子北）。

梶子北遺跡では，Ｃ層及びその下部の黒色土を耕作土とした水田跡が発見された。さらにこの水田も，後にＣ層に覆われてしまう。大小の畦畔により整然と区画された梶子北遺跡の水田跡は，主に弥生時代後期後半に営まれたものと推定される。水田覆土からは，古墳時代前期の土器が検出されていることから，前期のある時期に発生した洪水に伴う泥土により，この地での水田経営が不可能になったものと考えられる。よってＣ層の堆積は，３～４世紀にわたってなされたと考えられる。

伊場・城山・梶子遺跡には，これといった弥生時代後期後半から古墳時代前期の遺構は検出されていないが，遺物は各地で散見する。今回の調査区の西方にある城山遺跡７次調査区でも，包含層からは比較的まとまって当期の土器が出土した。古墳時代前期の遺構がこの周辺で確認されているのは，梶子北遺跡の北側砂丘部の高まりだけである。遺構は，砂丘の南縁に沿って掘られた溝と方墳である。しかし竪穴住居跡などは発見されておらず，集落の実態は明らかではない。



第６図　伊場・城山・梶子・梶子北・中村遺跡弥生時代集落の推定図

このように第１と第２砂丘の間の湿地において人が住めない状況は，古墳時代中期後半（５世紀中頃）までは続いたようである。

ｃ．古代の敷智郡衙

７世紀になると，各地で遺構が検出され，遺物が出土するようになる。伊場大溝での遺物の出土数は，おびただしいものがある。７世紀前半代の集落は，城山遺跡から伊場遺跡の西側に中心があったようである。城山遺跡５次Ｂ調査区では竪穴住居跡１軒，今回の調査区（①グリッド）でも，当期の掘立柱建物の柱穴ＳＰ01を検出している。そして①グリッド西方の城山遺跡７次調査区では７世紀末葉～８世紀初頭の竪穴式住居跡数軒分を検出したし，城山遺跡５次Ａ調査区と梶子遺跡９次Ｂ調査区では掘立柱建物群を検出した。後に郡衙となる有力な集落が，伊場遺跡から城山遺跡にかけて形成されていたものと推定される。

８世紀になると伊場遺跡西部地区において，掘立柱建物群が存在するようになる。それに対し，周辺部である村西遺跡や梶子北遺跡（第１砂丘面＝三永地区）においては，竪穴住居跡が存在する。郡衙を支えていた人々の住居と推定される。伊場遺跡で検出された建物は，掘立柱建物群で構成されているが，コの字形や口の字形を呈するなど計画的に配列されたものではない。伊場遺跡の掘立柱建物群は，郡衙に付随する駅家かもしくは厨の雑舎と考えられている。

敷智郡衙の中心は，現在唐三彩や金銅製の銙帯金具など優れた遺物を出土した城山遺跡の中にあると考えられている。しかし現状では，明確に郡衙建物と言えるものは何一つ確認されていない。

郡衙関連遺構の広がりは，南東では森田町九反田遺跡まで及んでいる。この遺跡では，伊場大溝の北に接して瓦葺礎石建物の存在が明らかになった。また北は，梶子北遺跡の大溝北岸（第１砂丘面）において，九反田遺跡と同笵の丸瓦や銙帯金具の他，「大領」と記された郡府木簡が出土した。大領は郡衙の長官であることから，城山遺跡の他，梶子北遺跡の北側の第１砂丘上に有力な村が存在した可能性が出てきた。現在調査を進めている中村遺跡においても，大宝令施行以前の木簡が出土した。

９世紀になると伊場遺跡は衰え，城山遺跡は最盛期を迎える。緑釉陶器やＫ14型式の灰釉陶器の出土は，遠江においては目を見張るものがある。しかし城山遺跡では，今までの調査で郡衙に関わるような建物群は，残念ながら検出されていない。４次調査で２棟の掘立柱建物跡が発見されているが，これは10世紀の建物で，小型である。

梶子北遺跡の南側では，コの字もしくは口の字形に配されたと推定される大型の掘立柱建物群が検出され，話題を呼んだ。多くの墨書土器や緑釉陶器などの出土からして，９～10世紀代の郡庁もしくは館と推定される。古代郡衙に関わる遺構は，周囲１㎞を越える広い範囲に存在し，しかも中心部分が固定して存在していたわけではどうもないらしい。

※城山遺跡に関する報告書は第２表に記載

※伊場・梶子・梶子北・東野宮・村西・村東遺跡の報告書記載は省略する

写真図版 1

A. 発掘調査
対象区
(北から)

B. 発掘調査
対象区
(南から)

C. ①グリッド
掘削作業
(北西から)

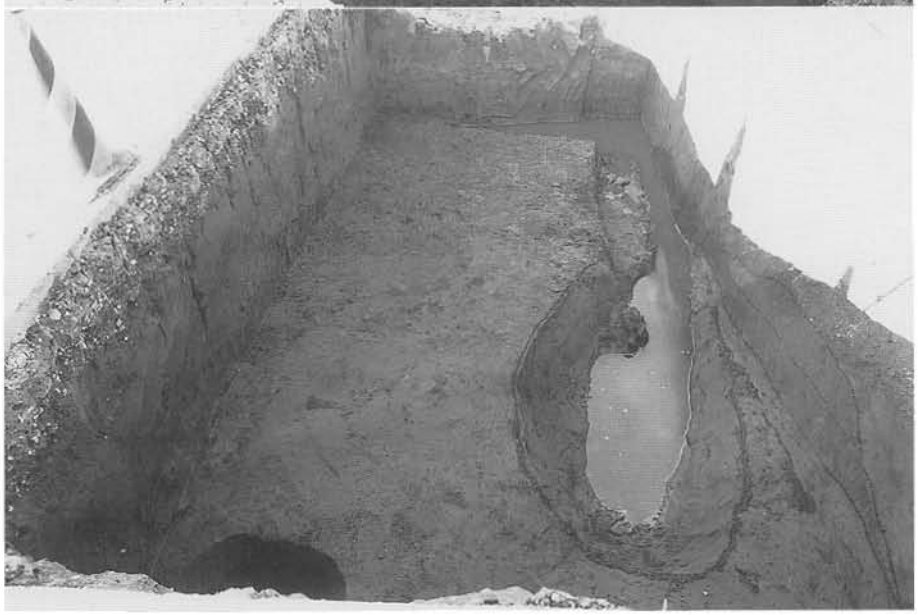
写真図版 2

A. ①グリッド
発掘作業中
(北から)

B. ①グリッド
全景写真
(北から)

左側(東側)に
方形周溝墓溝
SD01

C. ①グリッド
全景写真
(南から)



上(北端)に
中世溝SD02
左下(南西角)に
柱穴SP01

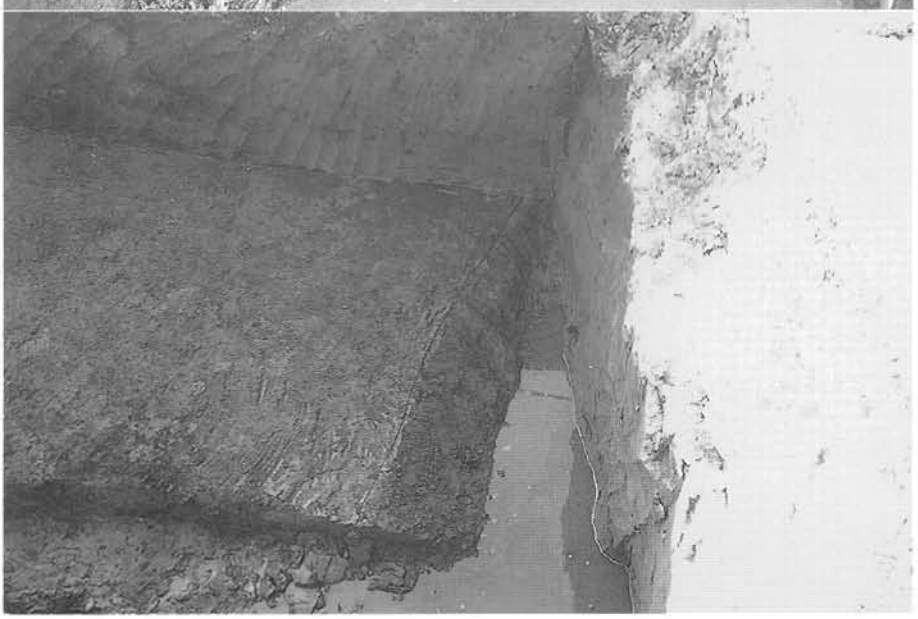
写真図版 3

A. 弥生時代中期
方形周溝墓
SD01
（南から）

溝から壺出土

B. SD01出土
中期弥生土器
壺
（南から）

C. 中世溝SD02
（東から）



写真図版 4

A. ②グリッド
掘削作業
（北東から）

B. ②グリッド
完掘状態
（北から）

全て撹乱

C. ⑤グリッド
掘削作業
（南から）

写真図版 5

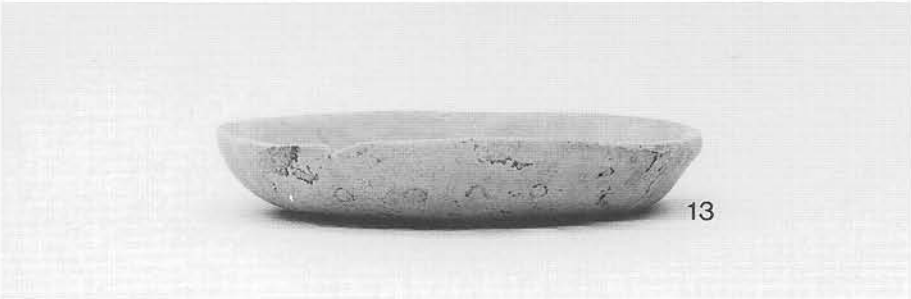
A. 出土土器

中期弥生土器
壺

B. 出土土器

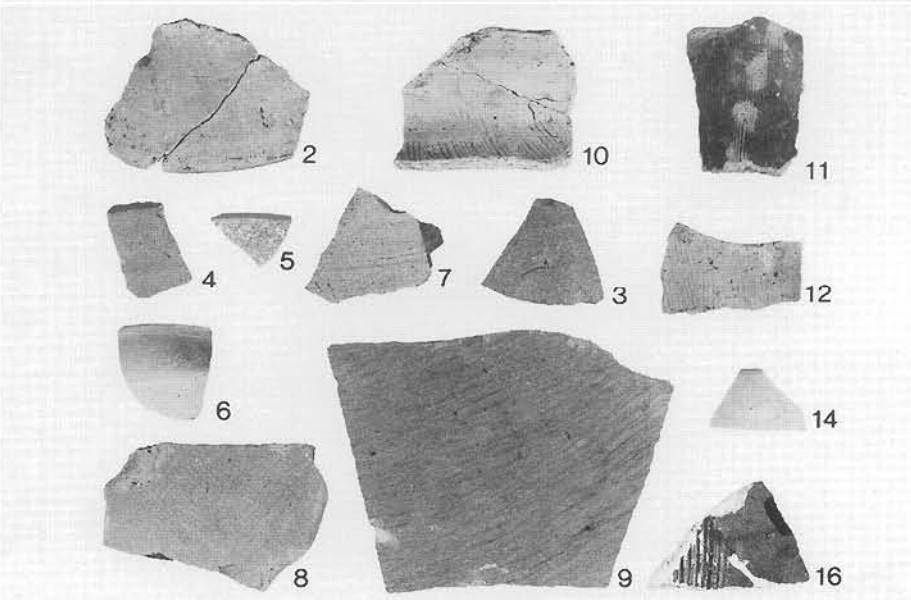
中世カワラケ

（円形刺突文）



C. 出土土器

後期弥生土器
須恵器
土師器
中世カワラケ
中世陶器



報告書抄録

書名(ふりがな)	城山遺跡（市下水）（しろやまいせき・しげすい）
編著者名	鈴木敏則
編集機関	浜松市博物館　〒432-8018　浜松市蜆塚４丁目22－１　053(456)2208
発行機関	浜松市教育委員会　〒430-0917　浜松市常盤町306-5ｲｰｽﾃｰｼﾞ浜松ｵﾌｨｽ棟５Ｆ 浜松市下水道部　〒430-0946　浜松市元城町104-6
発行年月日	２００１年3月１５日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 °′″	東経 °′″	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
しろやまいせき 城山遺跡	しずおかけんはままつし 静岡県浜松市 わかばやしちょう 若林町 ひがしわかばやしちょう 東若林町地内	22202	22-1	34度 41分 29秒	137度 42分 27秒	2000年 12月4日 ～ 2000年 12月8日	88㎡	市下水道工事に伴う事前調査

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
城山遺跡	墳墓	弥生時代中期後葉	方形周溝墓・包含層	弥生土器壺	方形周溝墓群の一角
	官衙	飛鳥～奈良時代	柱穴	須恵器・土師器	敷智郡衙周辺部
	集落	中世	溝	カワラケ・擂り鉢	中世居館周辺部

しろやま
城山遺跡（市下水）

2001年３月15日

発行　浜松市教育委員会
　　浜松市下水道部
編集　浜松市博物館　〒432-8018
　　静岡県浜松市蜆塚４丁目22－1
　　ＴＥＬ　053-456-2208
印刷　株式会社　開明堂